

# 幻の古代道路を追って

池田 誠一

## ■【8】山の辺の道…石川から音聞山へ■

### 1 直行か、迂回か

前回指摘した石仏からの二つの方向は、端的に言えば八事丘陵を、①直行するか、②迂回するかになります。

①の直行ルートならば、古代道路は古渡から石仏を通り、八事丘陵の山道を突っ切って、植田へ出て平針方面へと、ほぼまっすぐ進むことになります。古代東海道全体で見れば、このくらいの山道ならばまっすぐ進んだことは十分考えられます。しかし気になるのは、途中でこれはという古代史跡が見つかってい

ないことでしょう。

一方②の迂回ルートならば、石仏付近からやや南に振って八事丘陵の先を回りこむ道を辿ることになります(図1)。実は、このルート付近には古代の気になる史跡がいくつも考えられるのです。従ってここでは、今回と次回くらいかけて、この迂回ルートの気になる史跡のいくつかを追ってみたいと思います。

### 2 気になる史跡

#### (1)年魚道の水

万葉集の巻13に、年魚道(あゆち)の水を詠った有名な歌(長歌)があります。

小治田の年魚道の水を  
間無くぞ人は汲むとふ  
時じくぞ人は飲むとふ  
汲む人の間なきがごと  
飲む人の時じきがごと  
吾妹子にわが恋ふらくは  
やむ時もなし(3260)

歌は、あのあゆちの清水を汲む人が、飲む人が、絶え間ないように、私はあなたを思い続けています…という素朴

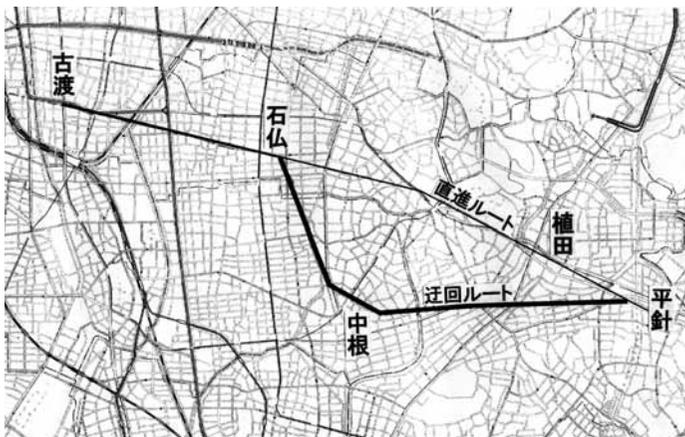


図1 古渡から平針方面への2つのルート案

図2 石仏から八事丘陵のスノを廻る迂回ルート(点線)



な恋歌のようです。問題は、その例えられた「年魚道の水」の場所が、どこなのかということです。江戸時代に契沖が『万葉代匠記』の中で尾張だとし、都まで聞こえたことから古い東海道の傍ではないかとしました。しかし大和(飛鳥)説もあって議論がなされていますが、今日でも尾張説は健在です(文献①等)。

これまで辿ってきた古代道路の石仏から東南、石川(山崎川)を越えた所に、この歌の石碑が建っています。瑞穂陸上競技場の東の松林を少し上った所で、戦前までは豊かな水が湧き出していたといえます(図2)。この井戸は、江戸時代の文献にもこの長歌の清水の候補地としてその存在が指摘されており、古くから有名な井戸だったようです。付近には縄文・弥生の遺跡である大曲輪遺跡など先史時代からの遺跡も多く、豊かな水と併せて、古代の清水の場所と推定されたのでしょう。

## (2) 丘陵の先端に

このあゆちの水とされる場所から西に1<sup>°</sup>ほどの所に井戸田があります。古代の終わり頃ですが、ここは都から東国へ流される人たちの流刑の場所のようでした。有名な人では、

平家物語に登場する藤原師高三兄弟や太政大臣だった藤原師長など、この井戸田の地で刑期を過しています。また源頼朝の産湯の井戸の伝説地もあり、ここにも豊かな水の話が残されています。

八事丘陵は、その南で笠寺台地とつながっています。この台地で気になるのが、丘陵の先端から2<sup>°</sup>ほど南にある笠覆寺で、笠寺観音として親しまれています。この寺を中興した藤原兼平は10世紀前半の人で、本尊も藤原初期とされるものです。縁起では、任地に向かう兼平が通りすがりに、雨にさらされていた仏像に笠をかけていた娘を認め、娶ったことが寺の再興につながりました。街道に近い所の物語であることを想起させてくれます。

この笠寺台地は、古代は伊勢湾に突き出た形になっており、周囲はあゆち湯と呼ばれる景勝地でした。そして702年、持統天皇三河行幸に随行した高市黒人の万葉集の歌、

桜田へ鶴鳴き渡る年魚市湯

塩干にけらし鶴鳴き渡る(271)

はこの台地で詠まれたとされています。三河から尾張を通過するの帰路の旅路の歌でしょうか。

丘陵の先端を曲り込むあたりが中根です。あゆち湯とか鳴海湯と呼ばれる湯を南に見下ろす好立地で、古くは根山とか、長根山と呼ばれたようで、荘園の名にも残ります。この根山は、中世には歌枕になって何人もの人に詠われているのです。

## (3) 音聞の山

八事丘陵の先を廻って東に進むと、左側に音聞山が近づきます。この山は、11世紀頃、

いつくなる山にかあらむ 雁かねの

おときき高く聞ゆるかな

と、古今集編纂者の一人、凡河内躬恒の歌の枕とされているのです(文献②)。そうならば、この山は古代から知られており、やはり街道から見上げる山だったのではないのでしょうか。その東には、中世にはなりませんが、大聖寺という、広く天白川流域一帯の八事迫と呼ばれる地を支配した天台宗の寺がありました。近くには「大市場」「沓打場」などの字があって、最近まで地名にその跡を留めていました。

古代道路の具体的な姿こそ見えてきませんが、古代から中世にかけて、詠われた歌や史跡が、この迂回ルートを支えてくれるように思えます。

### 3 絶行 丘陵のすそ

… 石川から中根を越えて …

石仏から東南の道跡を追って、山崎川を渡り、八事丘陵の山裾を辿って見ましょう。

#### 〈石川を辿る〉

地下鉄桜通線の桜山駅を降りて、桜山の交差点を東に進みます。2つ目の信号付近からはやや下り坂になっており、その途中を、昔は石仏から東南に進む旧道が横切っていました。その道を追って次の信号を右に曲ります。曲った道は坂の下の道になり、南に進んだ信号の右側には最近までガケが残っていました。前回説明した山崎川の古代以前の川筋が造ったものでしょうか。

川は、大正の区画整理の前までは、その先で、東から流れてきて、南へと大きく向きを変えていたのです。そのまま進むと5差路に出ます。右手に見える汐路小学校は東側が段

旧道の横切っていた付近。今は跡形もなくなりました。



八事丘陵の西端、東山荘のスソ。ここは塩付古道とされている



右の山裾の道を選ぶ



あゆち水の石碑と左下に井戸のあとが残っている

になって下がっており、その下は川筋を思わせる池が残っています。

ここで東南の道を選ぶとすぐ山崎川です。正面には八事丘陵の西端(東山荘)の森が見えます。その山際を進み、名市大薬学部の交差点に出ます。この道は、江戸時代以前の塩付街道の古道とされています。古代道路を考えるとすれば、大学敷地を突っ切って東南東に進んでいたのでしょうか。交差点を右に曲り、幹線道路を南に進みます。

少し行って右に分岐する道は塩付古道です。この辺りからルート候補は2つに分かれます。第1の案は、直線志向を優先し、この付近から東南へ小さな丘を越えて行く道です(図1参照)。第2の案は、右に塩付古道を進み丘の裾を回り込む道です。ここでは史跡をたずねるため第2の道を選ぶことにします。塩付古道はすぐ川にでます。この左の丘は琵琶の名手、藤原師長が逍遙したという故事から琵琶が峰と呼ばれていました。左の山沿いを進み陸上競技場の東で左に曲り、松林の中の道を少し上ると、あゆち水の石碑の所に出ます。

#### 〈山裾を辿る〉

石碑の上の道を南に進むと山下通交差点の

根の山がせままっている。まっすぐ下る平針街道。左手は中



傍に出ます。交差点の付近はかすかに峠になっており、山裾の道はここをこえて南に進んだのではないのでしょうか。広い通りの左側は急な坂で上がっており、その上には中根城のあったピーク(中根山?)がありました。山下通から2つ目の信号の手前に左に分かれる細い道があり、ちょうどそのピークを廻り込むように東に曲ります。この付近が中根で、道は平針街道と呼ばれています。道は東にまっすぐゆるやかに下っています。左側は先ほどのピークの南側で急な坂になっています。まっすぐ進むと昭和高校に突き当たります。

山沿いを進むため左に曲るとすぐ信号で突き当たります。左からの道は、先ほど分かれ



学校の北側。この左もすぐ丘陵に



下八事墓地。「大聖寺…」と刻んだ石碑が立っている

行く手の左に音聞山の緑が見えてくる



た直線指向の第1の道になります。この道は直進性からすると学校を横切って東に、島田橋の方向に進むことになるでしょう。ここでは山沿いをいくため、右に学校の北側を進みます。高校の向こうの広い通りを越えると、山地と平地の境がはっきりしてきます。その境の道を選ぶと300<sup>m</sup>ほど行った左に墓地があります。少し上ると、墓地の中央に先ほど述べた中世の古寺、大聖寺にまつわる石碑があります。墓地を過ぎて、また山裾を辿っていくと、左奥に緑の丘が見えてきます。音聞山の森です。そのまま広い道に出ると、すぐ傍に音聞山のバス停があります。

## 4 山の辺の道

今回は、これまでの直線指向から離れて山裾を廻る道を選びました。全国で古代道路とされる道には、平地には直線指向がありますが、山地は地形に合わせて進むルートも多いのです。問題は平地と山地との境をどう考えたのでしょうか。

奈良に、日本最古の道とされる山の辺の道と呼ばれる道があります。その道は、まさに三輪山の山裾、山の辺を曲りながらいく道です。もちろんそれが古代の道かどうかは分かりませんが、山の辺の道と呼ばれる道は大和平野の西側にもあるのです。まっすぐな計画道路が建設される前の道としても、山を廻り込んで進む山の辺の道は道の原初の姿のようにも思えます。

〈主な参考文献〉

- ①松田好夫『東海の万葉地理・尾張篇』(1964、名古屋鉄道K K)
- ②その他『尾張志』『尾張名所図会』など